

説教：「落穂拾い」

聖書：ルツ記4：7～17

フランスの画家ミレーの描いた「落穂拾い」がある。この絵は、ルツをイメージして、描かれているとも言われている。今日一日の食べる麦を拾ってしか、生きる術がない貧しい社会情勢を描いている。

ナオミとルツは、故郷に帰った時期は、ちょうど麦の収穫で畑を持たない二人は、他人の畑に行って、落ちている麦の穂を拾っていくしかなかった。ただそこにボアズという親戚に出会っていく。とても好意的に穂を拾わせてくれた。ルツの喜び、ナオミの喜ぶ顔が目には浮かぶようである。ただ、落穂拾いは、所詮落穂拾いである。収穫の時期が終われば、どう生きていけばいいのか不安が募る。ナオミはそのことを考えてか、ルツに予想だにしない行動を提案する。3章1節からそのことが記されている。《…ナオミが言った。「わたしの娘よ、わたしはあなたが幸せになる落ち着き先を探してきました。…あの人(ボアズ)の衣の裾で身を覆って横になりなさい。…》 私たちは、こういう箇所をどう読むか。なんと不謹慎なことかと思うものか。しかし、当時の習慣によると、こうした行為は、相手に対する保護を求める意思表示であったと言われる。足元にひれ伏すたぐいの行為であったと考えられている。

このところから、私たちの信仰生活は、落穂拾いの信仰になっていないだろうかと考えてみたい。ある時期は、恵みに与って喜んでいても、そういうものが無くなると、神への感謝もなくなり、信仰が薄らいでいく。またある時期に恵みを与えられて喜ぶも、また信仰が薄らいでいく…。収穫の時期だけ、神を喜ぶものになっていないか？ 相手任せ、その時期任せの信仰生活になっていないか？ ナオミが、収穫の時期が終わることを案じて、次の手を考えていったように、ルツがボアズの衣の裾で身を覆っていただいたように、私たちも“落穂拾い”という不安定は信仰生活ではなく、御言葉に従い、主の足元にひれ伏し、主の衣の裾で身を全身を覆っていただくのではないか。

誠実なボアズは、お姑のナオミとルツの思いを知り、正当な手続きを取って、人々に認められるように結婚へと向う。そして、オベデという息子が与えられた。このことがどんなに、幸いなこと、感謝な事であったことか。

この小さな出来事、一つの家族の出来事が、あのマタイ福音書のイエス・キリストの系図の中に出てくる。神は、ナオミを、ボアズを、そして異邦人のルツを用いてご自身の計画を成就された。このルツの物語から、今の私たちがどのような現状に置かれようとも、そこで神を待ち望み、御言葉に聞き従がうことを教えられていきたい。主の贖いは、私たちの歩みの中に現されていくのである。(神谷)